



中国への対処と 北朝鮮問題の本質

金融アナリスト
永山卓矢

【北朝鮮問題は米国の自作自演である】

北朝鮮を巡る地政学リスクが市場を揺さぶっている。

同国は16日にもミサイルを発射し(失敗したが)、軍事パレードでは初めて特殊部隊が披露され、さらには6回目の核実験を実施する姿勢を見せている。

これに対し、米国は米中首脳会談の最中の6日にシリアに59発もの巡航ミサイルを発射したり、13日にはアフガニスタンで通常兵器では最大の破壊力を誇る大規模爆風爆弾(MOAB)を投下した。一見したところ、両国で威嚇の応酬が続いている。

ところが、朝鮮半島に向かっていていると思われていた原子力空母カール・ビンソンはすぐに目的地に航行せず、インド洋で豪州軍と演習をしてから向かっている事が明らかになったあたり、実際には米国は軍事攻撃は考えていない事が窺われる。

トランプ大統領もそれまでは「全ての選択肢がある」として軍事攻撃も辞さない姿勢を見せながら、12日に電話会談が行われた後では、習近平国家主席を持ち上げて、中国の外交努力に期待する姿勢を示している。

そのあたりの事情をどのように解釈すべきなのか、またこの問題の本質を考察するにあたり、まず押さえるべきなのが、この地政学リスクは「自作自演」によるものだということだ。北朝鮮で主導権を握っている軍は親イスラエル勢力や米国の新保守主義(ネオコン)派に操られているが、この勢力は米国ではまさに現在のトランプ政権で主導権を握っているからだ。

【問題の裏側で行われているもの】

つまり、米権力者層は米国と北朝鮮との間で「一触即発」のような状態を演出した上で、トランプ大統領に「中国は大きな影響力を行使できるのに何もしていない」と述べさせて同国に積極的に関与するように促した訳だ。

これを受けて、中国は北朝鮮の重要な外貨獲得手段である石炭の輸入を年末まで停止する事を発表した。米国はそれでは不十分であり、原油の供給の停止を含むより抜本的な措置の発動を要求した。

国民の多くが飢えている国での原油の供給の停止は「兵糧攻め」に他ならず、体制の崩壊につながりかねないものだ。

言うまでもなく、トランプ政権の背後に控えている米権力者層は、中国としては絶対に北朝鮮の体制の崩壊は容認できない事を承知の上でこうした要求をさせている訳だ。

その背景には、米国側が北朝鮮問題を利用する事で、中国に対して強硬に市場開放を求めている事がある。

実際、トランプ大統領が「米国と貿易がしたいのなら、中国は北朝鮮に対してより積極的な役割を果たすべきだ」と「逆説的」に述べている通りである。即ち、米国と北朝鮮との緊張した対立状態が続くか、緩和していき収束に向かうかは、水面下での通商交渉で中国側がどれだけ譲歩するか、またそれを米国側が受け入れるかどうかにかかっている訳だ。

ただし、中国にどれほどの市場開放を求めるかは、米国側の各勢力により異なっている。

そもそも、トランプ政権は欧州ロスチャイルド財閥が米ロックフェラー財閥と提携した事で成立した経緯がある。

また同政権では、大統領の側近として敬虔なユダヤ教徒である娘婿のクシュナー上級顧問が依然として大きな影響力を行使している。

さらに最近では、バノン首席戦略官・上級顧問が国家安全保障会議(NSC)の常任委員からはずれて職業軍人出身のマクマスター大統領補佐官の影響力が強まっているところから、親イスラエル右派やネオコン派の背後に控えている軍需産業の意向を考察する必要がある。

【思惑が交錯する】

まず、中国に最も強硬に市場開放を求めているのが、トランプ政権に同財閥の「ハゲタカ」出身のロス商務長官を送り込んでいる欧州ロスチャイルド財閥だ。

この財閥はかつて、米ロックフェラー財閥の世界覇権に対抗するにあたり、「一帯一路」構想を提唱していた習国家主席主導の中国と提携し、同国の豊富な外貨準備を利用して新興国のインフラ需要を請け負い、巨大なユーラシア経済圏を構築しようとした。中国が設立を提唱していたアジアインフラ投資銀行(AIIB)に米国の反対を押し切って英国に資本参加をさせ、雪崩を打って他の欧州諸国もこれに追随していったのはこのためだ。

ところが、後に中国は天文学的な債務規模を抱えている実態が明らかになるにつれて、この欧州系財閥はそれを諦め、米ロックフェラー財閥と提携する事にした。そうする事で中国から資本流出を促進させる一方で、資本取引の自由化にまで至る市場開放を受け入れさせる事で、将来的に中国の国有銀行や代表的な国有企業を破格の安値で買収していく路線に転換した。それにより、いずれ世界覇権が米国から中国に転換していく事が見込まれる中で、長期的な観点から米系財閥より優位な地位に立とうとした訳だ。これに対し、米ロックフェラー財閥はそれに比べると中国に対して融和的である。それは一つには、同財閥直系のハゲタカであるブラックストーン・グループのシュワルツマン最高経営責任者(CEO)を介して習国家主席を取り込んでいる事がある。

それだけに、あまりに市場開放を強要したり北朝鮮問題で中国を追い詰めてしまい、習主席の立場が悪化するのではむしろ都合が悪いといえる。

またこの米系財閥は大勢的な観点では「新冷戦」構造を構築する事で、中国を相手に軍拡競争に持ち込もうとしている。「世界の工場」とされた中国の沿海部で人件費が高騰してしまい、米国でも格差の拡大による中間層の没落から世界の「一大需要基地」の役割を担えなくなっている事から、多国籍企業が構築してきたグローバル生産体制が機能しなくなっているため、軍需産業主導で世界経済を牽引していかなければならなくなっているからだ。そのためには中国で習国家主席による専制権力体制が強化され、また永続化されるのが望ましいため、そのためには必要以上に中国を追い詰める訳に行かない事情がある。

特に今秋には5年に一度となる重要な幹部人事が決まる共産党大会の開催を控えているだけになおさらである。

また軍需産業については、言うまでもなく積極的に国防費を増額していく好戦的な政権には好意的である。これから中東では「熱戦」を、極東では中国を相手に「冷戦」構造を構築していくにあたり、習国家主席の権力基盤が動揺するのは好ましくない筈だ。

親イスラエル派の最大の関心事はイスラエルを守るために米軍を中東に引きずり込む事であり、そのためには中東で紛争を多発させる必要がある。中国に対してはかつて、イランやシリアに核技術を伝授した事から「憎悪」しており、基本的には強硬な姿勢で対処する事を支持する傾向がある。ただし、あまりに米国の軍事力が極東に偏重すると中東方面が削がれて手薄になってしまう、都合が悪い。

実際、90年代のクリントン政権下で北朝鮮の核開発問題が高まり、武力行使の可能性がささやかれた際に、国防費が膨張して財政事情が悪化するのを恐れている外交問題評議会(CFR)系の意向を受けていたカーター元大統領や、親イスラエル左派のオルブライト國務長官(当時)が事態の打開に向けて北朝鮮を訪れたのはこのためだ。

このように見てくると、これまで北朝鮮問題の悪化を主導していたのは欧州ロスチャイルド系の勢力であることがわかる。これに対し、米ロックフェラー財閥や軍需産業、親イスラエル派としては、あまりに中国を追い詰めるのは得策ではない。米国が北朝鮮問題を「演出」しておきながら、表面的な姿勢とは裏腹に実際には武力行使に慎重なのはこのためだ。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

テクニカル

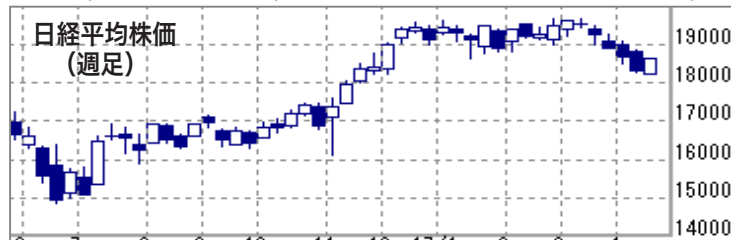
期待のV字反発

4月15日、金日成主席の生誕105年記念日は翌日のミサイル発射実験失敗で幕を下ろした。わざとかどうかかわからないが、北朝鮮が最後の一线を超えるまでのチキンレースのような感じに見受けられる。どこまで許されるのかを試したもので、単なるミサイル発射実験なら米軍も手を出さないと観たか。とはいえ両者、何もやらないことが屈辱につながりかねない情勢。北が何もやらなければそれでことが収まるが、金正恩のメンツが立たない。一方で北が何かをやり、米が何もやらなければランプのメンツが立たない。さあ、このチキンレースの最終幕はどうなるのか、誰もわからない。

現在は金星逆行が終了して大衆心理の転換になっている。この金星逆行は3月4日に始まり、4月15日に終了。なんとこの期間は日米株式の下げトレンドと合致。日経平均は金星逆行開始日の2営業日前に年初来高値。順行転換1営業日後に4カ月ぶりの安値、そして先週末は18,600円台まで上伸。V字反発の兆しが出た。当初から日経平均は「地政学的リスクが排除されれば、株価は反転してV字回復するとの見通しも変わ

ない」と述べたが、いまだ地政学的な面は不透明。しかしテクニカル的、サイクル的には反転上昇してもおかしくない。現在は水星が逆行を開始した。テクニカル的なダマシが頻発するが、日経平均の13～19週プライマリーサイクルの観点では先週の安値が23週目で延長PCがボトムを打った可能性が高い。

過去2回のレポートでは次の通り述べた「延長パターンに入っている。今週からは買い場探しに入る。先週述べた如く下値目標、及び方針は変わらず…17,889円±419……。今後2週間以内に急落が発生すれば上記の目標値は絶好の買い場になると見る」。先週の安値18,224は目標レンジの上限に入った。通常なら北朝鮮リスクが無ければ絶好の買い場。しかしこのリスクは神のみぞ知る。ストップを17,800円割れの引け値に設定して買い。



今週の押し

利食いは早く

現時点でフランス大統領選の結果は判っていない。私見ながら、一回の投票で結果は決まらないだろう。そうすると相場は二転三転し、5月7日の決選投票の結果で相場の大勢が決まる。

15日スローストキャスティクスを見ると、前週、ドル/円、ユーロ/円、ユーロ/ドルの数値が軒並み売られ過ぎの状態からユーロ/ドルだけが頭一つ抜け出した。これは18日対ドルでの英ポンド急上昇を受けてのもの。実際、ユーロ/ドルはこの時の連れ高で上値抵抗となっていた23日、69日移動平均も現在引け値で上回った。そして先週こう記述「リスクのとれる短期積極派は10日安値以下の引け値にストップロスを入れて買い参入して良いだろう。恐らく上昇は23日移動平均突破で本格化する。利食い算段はその時考えよう」。今週は1.08超えか23日平均を引け値で割れたら決済して様子を見たい。

これは現在が「利食いは早く」が合言葉の水星逆行中というもあるが、線形が昨年12～1月と似ているという点もある。

仏大統領選の結果がハッキリしていない今、4月10日の安値を割り込んでストキャスティクスと強気オシレーターダイバージェンスを作るような相場が出現するのではないかと見ている。取引は2週間程度待つからでも決して遅くないと考える。



アストロカレンダー

永井 元

年号で7の付く年は株が下がることが多いという。今年は2017年だ。1927年は金融恐慌の始まり。1957年は特段何もなかったが、株価は15%近い下落。1987年はブラックマンデーがあった。敢えて30年おきに振り返ったが、今年はブラックマンデーから30年目。何も起きないということはなさそうだ。

世界的な有事の緊張が高まり、いつやるかという段階になってしまった。ゴーサインがどれかは不明だが、関係国の首脳陣は既に「俺はやるぞ」と宣言したようなものだ。

いきなり事前通告なしにやったとしても、「前に言ったよ」ということになってしまっても仕方あるまい。

5月のホロスコープからイメージされるのは、ゴールデンウィークは株が突っ込んで前半は下げ止まるが、中旬以降で再び崩れるような印象。有事のような大事は月食や日食で起きるが、今年は8月である。湾岸戦争は7月の日食でフセインがクウェートへ侵攻し、半年後の日食でブッシュ大統領が開戦に踏み切った。

天体の動きに合わせたユダヤ系の戦略だが、北朝鮮はどちらかといえば、自国のカレンダー＝記念日に合わせて動くようだ。

どうなるかは不明。食料その他を少しでも備蓄した方が良くもされない。

アストロカレンダー 5月 永井 元

天文現象		注目マーケット	天文現象		注目マーケット
1月			16火		
2火			17水		
3水	上弦		18木	水星西方最大離角	株式
4木	水星逆行終了	全マーケット	19金	下弦金星・木星180度	アニバーサリーデー
5金	水星・火星45度	アニバーサリーデー	20土		
6土			21日		
7日	月赤道通過 火星・天王星45度	為替・小豆・ゴム アニバーサリーデー	22月	月赤道通過	為替・小豆・ゴム
8月			23火		
9火			24水		
10水			25木		
11木	新月	全マーケット	26金	新月 月最近	全マーケット
12金	火星・天王星90度 火星・木星120度	地産? 株式	27土		
13土	月最遠		28日	月赤道最北	穀物
14日			29月	火星・土星180度	小豆・貴金属・燃料
15月	月赤道最南	穀物	30火		
			31水		

今週の相場風林語録

損得に関係ない人に相場を聞くな

評論家（実践していない人）に相場の見通しを聞いても意味がない。

今週の九星★波動

南雲 紫蘭

5月は冷夏の如し？

共和党大統領恐怖のジクサー。

今市場でさやかれているのは、この恐怖のジクサーです。

確かに米国が共和党政権に移行する際、市場は大いなる期待で上がります。共和党大統領選出のモメンタムはすごいのです。

ところが、共和党政権に移ると、何故か株式は低調に、為替はドル安になる傾向が見て取れます。それは共和党政権にはぶち上げるだけの政策はあっても、実際にはその財源がないとか、貿易に関する自由放任的スタンスが（トランプ大統領の場合八と違いますが）期待と裏腹に失望に変わるからで、結局期待の落剥とともに米景気も後退していくというのが過去のパターンであったからです。

今度ばかりは違う、と思っていても、実際の相場は「トランプ大統領出現によるユーフォリア」「期待で買って現実で売る」という相場そのものになりつつあります。

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (392)

中原 駿

上野はそれでも3日間も田舎に滞在した。田舎に居たい、というよりは、東京にもシンガポールにも帰りたくなかった、というのが正直な気持ちであった。東京に帰っても、シンガポールにいても、もうどうにもならない状況になりつつあった。

いつかはシンガポールのポジションも悲劇的結末を迎えるかもしれない。いや、きっとそうなるだろう。

その時自分はどうなるのか。懲戒免職だろうか。それとも、民事訴訟を起こされるか。どちらも嫌だったが、避けられそうもなかった。

部下の巨額損失を穴埋めするために結局身分不相応な巨大なポジションで動かなければならなくなった。皮肉にも、そのことで逆にマーケットでは注目されるようになってしまった。

第六感の 金星逆行終了の転換



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

水星は逆行中もダマシを恐れず

ドル円相場は金星が順行に戻った1営業日後の4月17日に108円11と約5カ月ぶりの安値を付けた。この転換が効いているなら、以前から述べていた7～11週サブサイクルのボトム打ちと合致する。即ち、「サイクル的には7～11週サブサイクルの位相が現在は不透明。まだボトムを付けていなければ、今週は10週目になる。4月末までには一旦ボトムをつけると見る」。先週の安値は10週目で起こった。しかも上述の天体位相とも合致したことから、ここがボトムの可能性が高いと見る。たとえ下抜けても今週は11週目。ボトムはいつ付けてもおかしくない。目先は108円台が維持されるかを見届けたいが、積極的な投資家は108円台があれば買いたい。

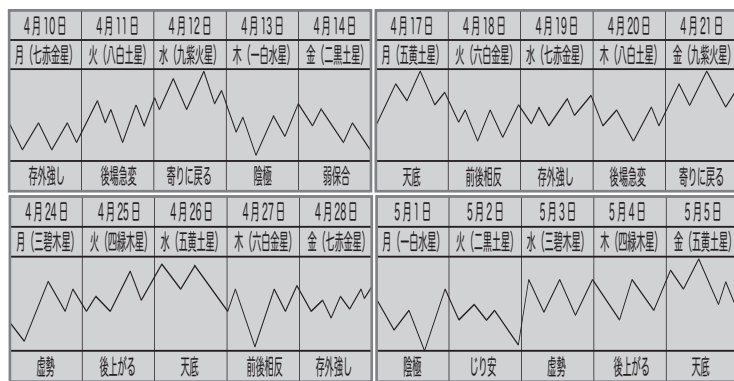
この108円フラットは重要だ。先週次の通りコメント「次は3月27日安値から31日高値までの倍返しで108円丁度」。なお、日足ベースでの二段下げのターゲットは108.40台。やや下抜けたが誤差の範囲内。

従って108円を下抜けるまでは買いを狙う。もし下抜けば、次の62%押し＝106.50がポイントになる。ここまで耐えられない投資家は108円割れの引け値にストップ。そして106円台でまた買い直しを狙うしかない。

現在108円台がボトムであるなら、ボトムフォーメーションが形成されるが、今の処、2時間足では17日をボトムとして、119.50前後にネックラインを形成しつつあるように見え

こうなると、トランプ大統領への期待が大きかったゆえに、その失望も大きいという苦境に立たされつつあるのが現在のマーケットでしょう。

九星高下伝は月盤《六白金星》も後半です。「前後相反。円高の流れも4月中旬までか」。この流れが止まらないうと、5月はまるで冷夏のようなドル安となりましょう。



ポジションがうまくいけば評判になるが、ポジションがアゲンストとなると、にわかに周りが上野をめがけ叩き出した。

そう、マーケットは「誰が買っているか」や「誰が売っているか」ではない。「誰が苦しいのか」や「誰が値を上げるのか」を見極めるゲームなのだ。

そして、その苦しい状態を成仏させ、その死骸をみんなで貪り食うのだ。それがマーケットの本質だ。

弱肉強食。世の習いと一緒なのである。

愚かさは罪だ。弱さも罪だ。負けることはもっと罪だ。

罪を犯してはならない。

そのためには強く、ずる賢く、立ち回らなければならない。

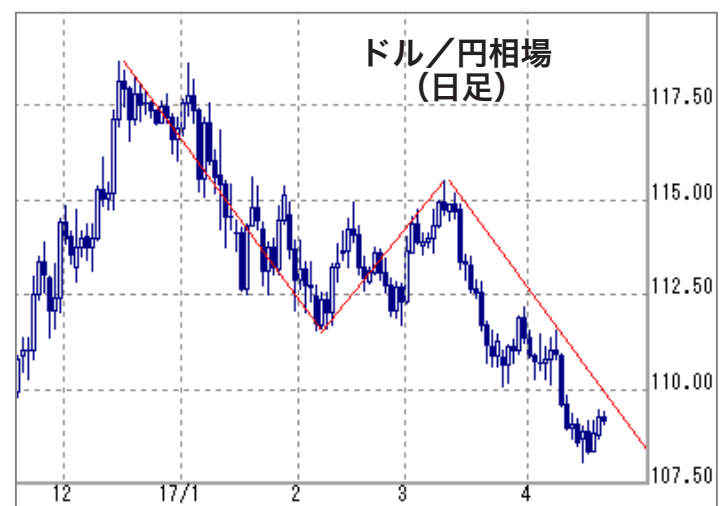
弱点を見せることは、負けることと一緒だ。

自分が苦しいと感じてはいけない。そんな時は周りも苦しいはずだ。もっと、自分より苦しいやつを探すのだ。

そいつを叩き落せば、自分は助かるかもしれないのだ…。

る。これは変則的な逆三尊を形成しているように見える。しかし時間足であるが信頼感は乏しい。17日安値が更新されるとボトムフォーメーションとし、下降ウェッジ系から最悪、続落して106円台を狙うフォーメーションが設定される。

さて、本来なら北朝鮮リスクは日本売りになるがこれが現実味を帯びてくれば、現在、時間足のボトムフォーメーションは維持され日足ベースや週足ベースでもV字反転が想定される。日足では110円以上で引けて来ればボトム打ちを確認する。その後週足ベースでの上値目標は113円以上になってくる。リスクリワードを考えれば、108円割れの引け値にストップを置き108～109円台を買う。110円±18銭で一部利食いして残りは113円以上を狙うストラテジーを考える。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第37回】ユーロ／円相場のサイクルについて（4）

ユーロ／円相場の週足サイクルはどうなっているのでしょうか。

ここまでこの相場は4年サイクル（48カ月）が2つの2年サイクル（20～28カ月）で構成され、2年サイクルは2つの1年サイクル（10～14カ月）2つで構成されていると仮定して来ました。1年は52週。これに対してメリマン氏の週間レポートである「MMAカレンシーレポート」ではユーロ／円のプライマリーサイクル（PC）の日柄は通常23～37週と定義しているの、1年サイクルの中にPCは2個入る計算になります。

では52週、その半分の26週、更にその半分の13週移動平均、これに15週スローストキャスティクスを付記して実際に数えます。2015年4月14日の126.09円から2015年11月27日の129.64円までが32週。ここから2016年6月24日の109.56円までは30週と、上記のサイクルの定義と合致します。

この安値から35週目が今年2月24日の118.20円。この時、相場は各種移動平均を下回り、このPCはボトムをつけました。

と、言いたいところなのですが、既に現行相場はこの安値を

下回っています。その場合、次のPCボトムは2月末から23～37週間後、つまり今週から15～29週間後になるのです。その場合、昨年6月安値を試す事になるでしょう。

しかし、別の考え方もあります。それは昨年6月起点のPCが43週目の先週、延長PCをつけたというものです。恐らくその場合、相場は52週平均を週足引け値で上回る筈です。逆に、2月安値がPCの起点だと52週超えは難しくなります。



メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

射手座ファクターとシャドウ期と

当欄では以前から4月の10日、14日、17日、21日の時間帯がアストロロジーの観点から相場の転換ポイントになると予測し「絞りきれない」とした。

先ず日経平均株価が17日に週の安値、21日に週の高値をつけている。米国株式も17日に週の安値をつけた。ドル／円、ユーロ／円、ユーロ／ドルの各種為替市場も17日に安値をつけている。逆にNY金は17日に高値をつけて下落している。

一方週末20～21日にかけての相場は先述の日経平均のみならず、米ドル指数が週の安値、ユーロ／ドルが週の高値を20日に、NY原油が週の安値を21日にそれぞれつけている。

通常モードであれば、軒並みこの反転ポイントから相場は反転しようと自信をもって言う事が出来るのだが、今回はそうも行かない。何故なら現在は水星逆行期だからである。

今回の水星逆行は米国時間5月3日、日本時間4日に順行に戻る。そこまでの相場はダマシが多く「利食いは早く」が合言葉である事はこれまで何度も述べてきた。これに加えて、金とユーロにとっては5月1～11日にヘリオ射手座ファクターと呼ばれる急変動の特異日が重なるのが気にかかる。

数年前まで、このファクターは相場の急降下からの急上昇と関連性が高かった。今回もこれに該当すれば、相場は5月第1週に向け急落し、そこから急騰しよう。しかしここ最近では急騰から急降下とも関連性が見られるようになった。そのため方向感が読めない。ただ、もし急騰急落パターンであった場合、5月18～21日付近が一つの節目として候補に挙がるのではないかな。

逆行は順行に戻ってもしばらくはその影響がある。これをシャドウ期と呼ぶのだが、4月15日に順行に戻った金星は5月18日、水星は5月21日にそれぞれシャドウ期を抜ける。年内最強の天体位相が終了し、しばらく星回りの大きな転換ポイントがない現在、この2つの時間帯は留意しておきたいところだ。

WEBサイトより一足早く、2週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 4月24日（月） 転換か加速
- 4月25日（火） 今日の動きは全て修正波
- 4月26日（水） マドは埋められる
- 4月27日（木） 小波から大波へ
- 4月28日（金） 金、原油の転換日 前後3営業日
- 4月29日（土） 太陽は政府、権力者、月は大衆心理を示す
- 4月30日（日） 太陽はゴールドとも関連する
- 5月1日（月） 保合い
- 5月2日（火） 国内商品は連休前に手仕舞い
- 5月3日（水） 水星が損傷されると付和雷同的になる
- 5月4日（木） 火星が強調されると争いに注意
- 5月5日（金） 木星は拡張、土星は制限
- 5月6日（土） 天王星は革新的、予想外を象徴
- 5月7日（日） 海王星は目に見えないもの、精神世界を象徴

*ゴールデンウィークのため、5月1日号はお休み致します。

次回の発行日は5月8日号です。

高く仕入れて安値で投げる投資家から
脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持続
けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例
で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望
銘柄掲載〉！



株で資産を蓄える

～パフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー

代表取締役社長

足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296円（税込み）